

～短期集中レポート～
“農業で学ぶ”

小学校における「農業科」教育の道を拓く挑戦 (9)

磯田 憲一

明治2年(1869年)に「開拓使」が設置されて以降、農地開拓や農業開発が営々と続けられ、今や農業を基幹産業とする北海道。しかし、154年此の方、今日に至るまで、どこからも、誰からも発意されることなく、実現されることのなかった小学校での「農業科」教育が、穀倉地帯の一角・美唄市で始まることになりました。農業王国を謳う北海道で「農業」の秘める“もう一つ価値”に新たな光が当たる取り組みがスタートしたのです。「農業“を”学ぶ」取り組みは、これまでもさまざまな場と形で行われてきましたが、その枠を超えて、生きものの一つという事実の上に立ち、「農業“で”学ぶ」ことを通して、この地球を持続可能な社会とするための遥かなる道のりに向けた、小さな自治体の大きな挑戦と言えるでしょう。未来から振り返ってみると「百年の計」に連なる確かな歩みの一歩だったと語り継がれていくに違いありません。

2023年5月16日、美唄市の板東知文市長が記者会見を行い、美唄の未来を切り拓く思いを込めて、北海道で初めての小学校における「農業科」授業のスタートと「農業科読本」の発行を正式発表しました。板東市長の発言の概略を報告したいと思います。

『私が美唄市教育長だった時、農業の持つ力を次代を担う子どもたちに伝えていきたいとの思いで、2010年度から「小学校農業体験学習」をスタートさせ「農業体験学習副読本」も作成しました。それは、福島県喜多方市の先駆的な取り組みを知ったことが契機でした。喜多方市は、2007年から、小学校で「農業科」授業をスタートさせました。喜多方市が日本初の「農業科」に取り組んだのは、生命科学の第一人者として「生命誌」の世界を構想した中村桂子さんが「人間は生きものであり自然の一部」という事実をもとに「子どもたちが、生きることの本質を学ぶ機会として“小学校で農業を必須に…”」と提唱したことを受け、その熱い思いに共感した、当時の白井喜多方市長が「農業科」を小学校教育に組み込んだのです。

その中村桂子さんが、昨年(2022年)8月、美唄市内の「アルテピアッツァ美唄」で講演される機会があり、その折、前述したように、中村さんから「農業の体験学習は今や一般的だが、あくまで体験の域にとどまる。学校の時間割の中に、国語、算数、理科、社会と同じように“農業”と明記されていることが大切で、そのことで、子どもたちの心に“農業”への思いが深く刻まれていく」という貴重なアドバイスをいただきました。



中村さんの次代を見据えた的確なアドバイスを踏まえ、美唄市としては、今年度から小学校の授業時間割の中に「農業科」を組み込み、継続的に「農業で学ぶ」取り組みを進めていくことにしました。また改訂版づくりを進めていた「副読本」についても、“副”を取り、「農業科“読本”」として発行し、「農業科」授業を進めていく手立てとしての役割をより明確にしました。

今回発行した「農業科読本」の第一章に、美唄の子どもたちに向けて「あなたが生きものであることを学ぶ農業」と題した中村桂子さんのメッセージを掲載することができました。今を生きる全ての人たちの心にも届けられるべき、深いスピリットに満ちていると感じます。

この読本に基づく「農業科」授業を通して、子どもたちの心に、この地球に生きる上での謙虚さ、同じ生きものである仲間たちに向けた優しい眼差し。さらに、その学びを通して美唄の子どもたちの胸に、この美唄、そして北海道に育ち暮らした「誇り」がゆっくり湧き上がってくることを信じたいと思います」。

私が教育長であった時代にスタートした「農業体験学習」「副読本」が、13年の歳月を経て「農業科」そして「農業科読本」へと進化し、全国でも類い稀な先駆的取り組みとして新たなスタートを切ることになったことは、美唄市の未来に向けた地域づくりにとって、大きな意味と価値を持つと考えます。

「農業科」の推進に先駆的に取り組み、大きな成果を上げている福島県喜多方市とも連携の輪を広げ「農業の時代」と言われている今日、農業の持つ根源的価値を深めていく役割を果たしていきたいと思います。

記者発表の締めめに、農業科読本編集委員会の特別アドバイザーである「農業で学ぶ教育の輪をつなぐサポートチーム」の磯田代表（一般財団法人 HAL 財団理事長・認定 NPO 法人アルテピアッツァびばい理事長）に参加いただいている経緯に少し触れさせていただきます。「アルテピ



アツツァ美唄」には、3年前まで市立栄幼稚園が開演されていましたが、残念ながら65年の歴史に幕を下ろし閉園しました。その後、市は、閉園後の「利活用検討委員会」を設置し、磯田代表にも参加いただき、2年に及ぶ議論を経て、2022年3月「幼児教育機能を多様な形で取り戻し、子どもの生命という普遍的価値を育む空間としての役割を果たすべき」という確信に満ちた提言が出されました。美唄市民の誇りを育む確かな道に向かう新しい未来像が提起されたのです。そうした方向に向けて、管理運営を担うNPO法人「アルテピアツツァびばい」が中心となり、「アルテピアツツァ美唄30年、次なるステップへ」事業が企画され、中村桂子さんをお招きしての記念講演会が開催された訳です。今後「農業で学ぶ教育の輪をつなぐサポートチーム」の代表として、美唄市とも連携し、授業としての「農業科」を推進するという「美唄モデル」を各地域に広めていく活動に取り組んでくださることになっています。

『農業王国・北海道に、「農業科」の輪が広がっていくことを心から願っています』

2023年5月16日(火)美唄市役所での記者発表模様
(写真提供 美唄市教育委員会)

(注:肩書は当時のもの)
(第10号に続く)

この記事のURL <https://www.hal.or.jp/column/1423>